

信州昆虫資料館報

No. 5

2010-1



2009 年を振り返って

館長代理 野原未知

山田昆虫画 再び故郷「山口県」に

信州昆虫資料館ではもうお馴染みの、山口県岩国市の昆虫画家山田靖さん。

2006 年 11 月にはじめてお伺いした。あの時は山田さんご夫妻と隣町に嫁いでいる娘さんが待っていてくれた。山田さんは恥ずかしそうに次々と、長年描き溜めてきた昆虫の絵を出して見せてくださった。ちょっともごもごして聞き取れないこともあったが、お元気だった。第 2 次世界大戦 de 衛生兵として東南アジアを転戦した。

絵が好きで虫が好きな青年は、目の前で倒れていく仲間の手当てに追われながらも、赤チンで珍しいチョウを描いていた、上官に見つかればただでは済まなかっただろう。

非常時であろうとなかろうと、時の態勢を握っているところの示す方向は、どうしたって個と対峙する。人が大勢集まって作動的に組織を作れば権力を持つ。ひとつの権力に対していつもアンチ勢力が組織立ちまた新たな権力が体制を握り政治を動かす。

誰しも良かれと信じて我こそはと立ち上がる。そうやって人間社会の歴史は刻まれてきた。芸術や科学文学なども力あるものに喜ばれて初めて浮かばれもする。

だが時に、いつの時代にもそうではない作家や研究者というもの居た。常に時代の底辺に存在し、自分という個が何ものなのか、何処から来て何処へ行こうとしているのか、生きるということがどういうことなのかを思索しながら、個に徹底すべく政策や研究に没頭した。そんな人たちが古今東西たくさんいる。

山田さんがその一人であるかを問うこともない。

「好きなものを好きなだけ描いてきたんじゃ・・・まだ描き足りないがのう」。

その言葉に尽きる。農業の傍ら、趣くまま好きなことをし続けた。時代や社会がどうあれ彼は彼自身を生きたのだらう。無名画家が放つ光を観る想いである。

山田さんは私に作品を託した。それは信州昆虫資料館に作品を寄贈したということであり、その旨の一筆もいただいた。そして、館代表小川原先生がそれを受けた。

そうなる事は急がねばならない。当時山田さんは 88 歳。ゆっくり構えている余裕はない。

春先、館友の宮本修さん、大川心一さんに頼んで 3 人で作品を頂きにあがった。列島本州の真ん中から、一番西の件への長い旅は一人の作家との出会いの喜びと責任、旅の楽しさと作品を傷めてはならじの緊張感で大変なものだった。

山田さんは、私たち 3 人に戦争や制作過程の話をし、歌を沢山唄いハーモニカも吹いてくださった。実はもごもごしているので話の内容は聞き取りにくい。唄もハーモニカも違う曲名を仰るのだが、どれも同じ曲になっていたが、心で聴くと見事にその曲に思える。山田さんは私たちに帰ってほしくないものだから、次々と延々と止むことなく歌とハーモニカは続いた。悲しくなるほどに続いた。が、ついに私が口火を切った。

「そろそろ長野に帰ります。」。数百枚の絵を車に積んでいよいよお別れをして発つとき、山田さんは不自由な足を引きずって外に出て来た。玖珂の丘陵にある農家の一軒家、その玄関先まで出て来て別れを惜しみ、手を振って見送ってくださった。おそらく山田さんは泣いていたに違いない。実は私たちも。

青木村十観山 1000m 地帯にある信州昆虫資料館に帰ってからの 2007 年は、作品の埃を払い汚れを取り、額装に努めた。同時に小川原館長は、空いている部屋を改装し常時 80 点ほど飾れる展示室を作って下さった。夏には「山田靖昆虫画展示室」がオープンした。

翌年 2008 年 3~4 月にかけて青木村郷土美術館で (村長・宮原毅氏 館長桜田義文氏)、4 月に岩国市市民ギャラリー(市長 井原勝介氏 教育長 磯野恭子氏 周東支所長 南谷多賀夫氏)で、山田靖昆虫絵画展が展開された。その様子は館報No.3 に詳しく載せてある。

立派なポスターやパンフレットを作って頂き、岩国市教育委員会の皆さまが総出で片づけに現れてくださったときは感謝で涙が出た。その岩国展を観に来て下さっていた隣町 (久我銀和木町) の文化協会、海井さん・島崎さんのお計らいを戴き、和木町美術館での開催が決まった。

玖珂郡和木町美術館 山田靖昆虫画展 2009.7. 18~8.31

和木町 (町長古木哲夫氏、文化協会会長岡本勝之氏) は、岩国市と広島市の間にある瀬戸内海に面した小さな町で、お温厚な人たちが暮らしている。その展覧会に併せて山田作品を 270 点ほど送り、新幹線で初日に駆けつけた。会場はすでに和木町文化協会の方々により見事に飾り付けられていた。立派なポスターやフライヤーも作られていた。

絵の展示は実は簡単なことではない。ご苦労が目に見える。

「山口むしの会」の方が、地元産の標本も並べて下さり生きたカブトムシも採集して下さった。初日含めて終了まで、毎週さまざまな企画を盛り込んでありこれは大変なことだなあと感じた。まずは「虫の絵を描こう！」ということで会場の真ん中に机を並べ、カブトムシ・クワガタを見たり触ったり。パステルや水彩絵の具が用意され町の画家たちが指導にあたっていた。誰でもクレヨンや筆を手を持ち、白い紙に向かうとどきどきするものだ。ひとたび描き始めると無我夢中になる。それがまたいい。

もちろん虫も絵も大嫌いという人もいる。それもいい。

隣の岩国市の山田さんに、これほど関心を持ち我故郷の昆虫画家として展覧会を企画して下さった和木町文化協会の皆さまは凄い。有名無名にかかわらず、ひとりの老画家の作品を暖かく迎えてくださったお心に敬意を表したい。ボランティアの皆さんにも心から感謝である。想いが集まるといこと、集めるといことについて教えられた気がする。

さてこんな会場に山田さんが来たら、きっと一緒になって書いて遊んだに違いない。なぜそれが出来なかったかという、昨年の 5 月に入院されてしまったためである。元々足腰が弱くなっていた。そんな折に転んでしまったらしい。寝たきりになっていると事前に

娘さんから聴いていた。

翌日、岩国科学センターの石本氏に案内して頂き山田さんの入院している周防病院を訪ねた。そこには奥さまが先に入院されており後から山田さんが入院した。同じ部屋にいるのかと思ったら別棟だった。思っていたよりも悪い状態だった。誤嚥障害があるので点滴だけで生きていた。無意識に管を抜いてしまうので両手を縛られていた。これでは絵がかけないではないか！ 何から話したらよいのか分からない・・・

「山田さん、長野から来たよ！隣の和木町で山田さんの展覧会が始まったよ！」

大きい声でそれだけ言った。山田さんはしっかり手を握り返してくださった。あとはボロボロ涙がこぼれるだけで何も言えなかった。

しばらくののち、山田さんのクワガタの絵を A2 サイズにしたポスターを娘さんに託し、奥さまのイツ子さんを見舞った。天使のようにツヤツヤとした肌でにこにこ笑っていた。

「どなたさんか分からないけど、いまこんな恰好じゃけ また家に帰ったらおもてなししますねの」と仰った。以前よりずっと若くにこやかになっている。入院している夫のことも分からなくなって子供に還ってしまったのかもしれない。

娘の敦子さんに挨拶をして帰途についた。和木町の皆さん、ありがとうございます。岩国の皆さんありがとうございます。

連綿と・・・

こうして短期間の間に、作品の保存作業、額装、展示コーナー作り、青木村、岩国市、和木町と、大きな展覧会が続いた。恒例の山田さんをご存命なうちに！と心に刻んだことが現実になったのは、有形無形の多くの協力なしには出来ないことだった。

今まで誰にも言えずにいたが、私を突き動かしあもう一つの大きな理由がある。

未だ若い頃、長野市で晩年を過ごしたある無名画家「森温理」と 2 人展をやった。

パステルで描かれた独自の作品世界が物語るものに 20 代そこそこの私は耳を澄ませた。それから 13、4 年のちに 79 歳で亡くなった。ずっと会ってはおらず亡くなっていたことも知らなかった。残された作品を巡って 30 代そこそこの若い仲間が集まった。

自分の基本的な想いは、天地がひっくり返っても自分の筆を折らないことにあった。がただの人間でもあった。情にほだされ残され、絵に関わることを放棄できなかった。

画家の郷里は朽木だった。姪に当たる方が東京方面に居るとのことで探し尋ねた。再三再四何度も連絡を取り合っ身内の方と若い仲間て作品を活かすべく奔走した。

保存作業も然り、自分だけの記憶に留めるのみならず作品や画家の活きた証を残そうと懸命になった。長野市の大きなギャラリー（82 ギャラリー）で画家の作品を紹介しながら仲間たち展を開催した。赤い表紙の小さな画文集を出版した。が、事は簡単には運ばなかった。自分も仲間も若く、力も知恵もなかった。しかもまだ幼い子の子育て中であり、

自身の制作もまだまだ駆け出したところだった。温理作品はお蔵入りにするしかなかった。既にあちらに逝ってしまった温理は、決して急いでいない。

後日、作品は他の仲間に引き取られ、時は否応なく十分に流れた。

そして再び無名画家の作品に遭遇した。それが山田靖さんだった。

最初、顧問の安藤裕先生が「甥が送ってきた」からと中国新聞を持参された。長年描き溜めた昆虫画他の作品群を何とかしたいが、受け入れ先はないものか・・・という山田氏ご本人の写真入の記事だった。安藤先生も、代表小川原先生も興味を持った。作品と係るといことがどういことか覚えのある私の胸はズキンと痛んだ。知らないで過ごせるものなら・・・とも思ったが、作品の力はそれを超えた。山田さんと森温理が重なってしまった。故森温理に後押しされているような気がした。こうしてひとつの成り立ちは、いきなりのものとは違う。無関係に見えても連綿と続く生命のやりとりがある。もたもたしている場合ではなかったのだ。

これからの山田作品について

ボランティア館友により、全作品をスキャナーデータは間違いなく保存できている。昆虫作品原画も4分の3は額装できた。昆虫以外の故郷の風景や田畑で働く人たちの姿、道具、牛、馬、遊ぶ子供・農家の家屋や内外の様子など近代史を物語る絵もたくさん在った。それは長野県の田舎の風景と重なるものがあり、昭和初期からの民俗史として子供たちに見せてやりたい慈愛溢れる作品だったが、当館の現況を考えるとお蔵入りになる可能性がある。

迷わずそれらを段ボールに詰めて岩国の教育長さんに送った。山口県で活用して頂くのが良いと思った。また、企画展時等に互いに活用しあうことを提案させていただいた。

磯野教育長は以前、人間魚雷「回天」の映画の編集もされた想いの深い女性である。多くを言わず了解して下さった。昨年の和木町美術館での山田展には早速それらの作品が並んでいた。こんなふうにならずに縁を繋げて行けたなら世界中どこでも実現できる。

ベッドの上でギリギリの命を繋いでいる山田さん。山田さんの意志で作品は遠い信州の昆虫資料館に寄贈された。もう一度起き上がって、ご自分の展示室に立っていただきたいと私は祈っている。

7月から8月いっぱいまでの展示を終えて、作品は和木町から戻ってきた。そして秋のある日、宅急便が届いた。何だろう？ 開けてびっくり玉手箱！ 見ると山田靖展開催中に企画された「昆虫画を描いてみよう！コンクール」で入賞された皆さんの作品だった。幼児から大人の部まで見事な作品群。和木町のスタッフは、きつとびっくり大喜びする私の顔を想像しながら、にやにや荷造りしたに違いない。やられた。

私を後押ししてくれたこと

山田さんの作品を扱う道すがらは困難や迷いもあった。そんな時、私の背中を大きな手が押してくれていた。あの手は温理のものだったか。どれほど温理さんの人生を想い、どれほど中途半端になってしまったことを、見えない温理さんに謝ったか。どれほど今まで関わってくれた仲間に頭を下げる想いでいたか。制作や表現にかかわる仕事が出来ずにいる苦悩を救ってくれたのは、山田さんだった。そして人間の言葉を持たぬ蟲たちだった。そんな私のことを知ってか知らずか温理作品は、長野県松本市(旧四賀村)の山の中でライブハウスを始めた舞踏家のビオパーク劇場の 2 階に納まった。山田作品が和木町での展覧会を開催されている同時期に、松本の山の中では「エルフィンランドの 4 人展」が開催された。主は温理の仲間でもあり朝倉氏の友人の小島五郎氏(横浜市)だった。小島氏の想いを受け止めたのはビオパーク劇場主宰の本木幸治氏で、会場を埋めたのは故森温理/朝倉征男/緒方真太郎/野原の作品たちだった。

本木氏は、精神と肉体を限りなく接近させ、時間と空間を漂うような舞踏を展開する、日本でも数少ない限りなく優しいアーティストで昨年はフランスでも講演した。82 ギャラリーでの温理と仲間たち展でも踊ってくれた。20 歳ころの私の作品を、非常に気に入ってくれたので感謝を込めてそれを贈った。ビオパーク劇場の向かい側に建設中の、茶室入口に飾るよと言った。その数か月後に突然死するなど誰が想像できただろう。本木氏は、2009 年 12 月 6 日未明帰らぬ人になった。60 歳を迎えたばかりだったという。連綿としたいのちの繋がりの人達が、向こう側へ逝ってしまう。

山田作品を扱う私を向こう側から後押ししてくれた森温理、森温理を後押しした多くの仲間たち、まだ生きて居る自分。2008 年夏、山田昆虫画の岩国展を喜んでくれた私の父も、同年秋、静かに他界した。父の活きた証しも何かしらの象(カタチ)にしたいと湧くものがある。東京大空襲で焼け出され、両親兄弟妹皆で疎開せざるを得なかった父の苦悩の日々は、私の幼き日の在りように直結する。

さて山田さんは、ベッドの上で食べることも絵を描くことも出来ずにぎりぎりの生を生きている。さぞ悔しかろうに、何もしてやれない。

健康な私たちは、しようと思えば空だって飛べるのではないか・・・とってしまう。やるべきことは山のようにある。現在只今、それぞれに呼吸している現場で出来ることを一生懸命やっていく以外成す術はないのに、無理や怠惰に気付くのはいつも後々になる。人の一生はさほど長くないが、焦るとろくなことにならない。

ヘルマン・ヘッセ昆虫展 2009.9.9-9.30

栃木県矢板市の山の中に、県の森林管理事務所がある。その一帯は程よく手が入り森林公園になっている。公園といっても原色が溢れる街のものと違い、出来る限りその土地の植生を活かし、なおかつ間伐など山に手が入っている感じ。

その1階部分がマロニエ昆虫館だ。愉しく分かりやすい標本展示、発光ダイオード・マイクスピーカーなどを駆使して昆虫の専門家の声が聞こえる装置など、面白い展示を施してある。すべて主任の新部公亮さんの仕掛けである。一度「どくとるマンボウ昆虫記」の標本展示を含む朗読会に参加したことがあった。時間の余裕がなく途中で失礼してしまったが、同市の伊藤しのぶさんは北杜夫の昆虫記をほとんど頭の中に入れてあり、本を開いて読むということではなくそらで語る。どうしたらそんなことが出来るのか。自作品をいとうさんのかたまりで聴かれた北さんが、ビックリされていたと。

さもあらん。感慨深く「神聖なる糞虫」を聴かせていただいた。

そんなご縁から、昨年の冬新部さんより「ヘルマンヘッセ昆虫展」を打診された。正直尻込みした。ノーベル文学賞受賞者、文豪ヘッセを扱うには私如きには荷が重い。返答に困っていると見過ごしたように「展示はこちら(新部さん)でやりますよ」とのこと。ありがたく秋に企画した。会場は2階の講義室。村の美術館にパーテーションを借り、隣村の館友じろうさんにトラックを出していただき、塩田から来ていた来館者にボランティアを頼み・・・と俄か仕立てのスタッフで会場を作った。そこへ新部さん一式携えて到着。すみやかに展示作業は始まった。

文豪ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)は、少年の頃から飛翔する蝶・蛾に関心があった。昆虫採集もしていたし標本も作っていた。やわらかな美しい色彩で水彩画もたくさん描いていた。「Das nachtpfauenauge—くじゃくやままゆ」は1911年に発表した短編小説である。

ドイツで発行されている単行本や全集に収録されているのはすべてこの初稿らしい。

20年後の1931年は自ら改稿し「Jugendgednken—少年の日の思い出」と題名も替え、ドイツの地方新聞に掲載された。ドイツ文学者高橋健二が同年にヘッセを訪ねており、別れ際に直接渡されているのがその切り抜きだった。1947年に高橋健二訳の「少年の日の思い出」が日本の国定教科書に載った。以来60年間継続されている。

この小説は、現在では日本でしか読めないらしい。(Wikipedia 参照)

当展覧会では、高橋氏訳の教科書と日本昆虫協会副会長の岡田朝雄氏(ドイツ文学者)訳の「少年の日の思い出」が掲載されている教科書の双方を手にとって頂けるようになっていた。新部さんはこの作品を具現化しようとドイツ・スイスから取り寄せた蝶・蛾の標本と、ヘッセの史や文章をドイツ箱の中に美しくレイアウトした。ヘッセの水彩画の複製を施し、ミラー版などを使って標本の裏側も見せるなど創意工夫された楽しい展示内容だった。来館者も昆虫愛好家や研究者のみならず、文学に傾倒されている方々や学校の先生

方もお見えになった。文学者は生涯ノスタルジックな小説や詩ばかりを書いている訳ではない。ヘッセの生きた時代は大きな戦争を含め激動の嵐だった。彼自身の五感が鋭く社会や人間を凝視していた。虫に心を寄せ、絵を描き、旅をし恋もした。また深い精神的危機にも襲われた。ナチス政権時代には「時代に好ましくない」とされ、神の配当も禁止された。平和主義を唱えていたヘッセはスイスに移らざるを得なかった。彼の作品はそれら原体験が元になっている小説が多い。そして全人的なヘッセの内に、幼少期からの昆虫体験が大きく作用していることを感じている。

来館者は一様に「文豪ヘッセと虫たち」に興味を持たれ長居された。

「知らなかったヘッセの一面を見せて頂けた」「ヨーロッパの蝶や蛾を初めてみた」

車輪の下・少年の日の思い出だけは読んだ気がするが、多くの著書があったこと、水彩画家でもあったこと、さらに昆虫愛好家であったことには感動だ」などの感想が寄せられた。会期中の9月21日には、新部さんの講演というしのぶさんの語りを開催。ここでも

ヘッセのファンが大勢お見えになった。特に関東方面からの皆さんが多く、夜は遠保からの女性たちと過ごした。翌日は、当館でもゆかりのあるマダラヤンマ保護研究会の企画見学会があり皆で池の周りに興じた。いとうしのぶさんが池の傍でエネルギーが切れたようになってしまった時は慌てたが、大事なお帰りになった。良かった。

当日参加できなかったのと、軽井沢高原文庫の大藤さんが後日来館された。話は自在に飛び、有難いことだった9月末で会期は終わり、ヘッセ展作品をマロニエ昆虫館にお返しに行った。無事引き渡し、ようやく一山越えてほっとして帰途に着く私に新部さんはすかさず「おみやげ」を持たせた。・・・「ことわざの虫たち展一式」。

ことわざの虫たち展 2009. 10.2-11.30

こともあろうに、休む間もなくヘッセ展の会場は「ことわざの虫たち」展になった。

「一寸の虫にも五分の魂」「飛んで火に入る夏の虫」「蓼（たで）喰う虫も好き好き」

「虫が好かない」「虫の居所」「腹の虫」・・・味わい深い言葉を産み出す日本人のセンスは素晴らしい。土に紙に木で住まいを作り風を通し光を入れる。自然から頂く知恵はフル活用して先人たちは暮らしてきた。虫たちもすべて自然に即して暮らしている。

新部さんの標本箱にはそれらことわざについての本人のエッセイ（新聞に掲載）が貼られ、虫の標本とセットになっていた。ヘッセ展同様、創意工夫された楽しい展示に来も「なるほど」と納得。標本になった虫達を、レイアウトひとつで虫に関心がない人の心を掴む。評判がいいので、館が冬期休館に入るまで展示していた。来春には北斗市で開催するとう。現在北斗市で開催されている「どくとるマンボウ展」がこちらに来ることになった。

館の春一番は北杜夫さんで始まるようだ。

70年を越えたヘッセの標本

さてそれら一式の制作に勤しむ新部さんだが、ヘッセ展の出前はついにヘッセの故郷に

招かれた。この 2 月にはドイツ文学者でありヘッセ文学の訳者でもある岡田朝雄氏とともにドイツ南部のカルフにあるヘッセミュージアムに向けて発たれるという。

昨年、ヘッセが採集したベニヒカゲチョウの標本が日本に在ったことが判明したと新部さんが興奮して話して下さった。関西の愛好家の方が、20 年ほど前にドイツ旅行の際購入したらしい。当館でのヘッセ展の後、大阪で開催されることを知ったその方が新部さんに手紙を出した。新部さんと岡田先生の検証が始まった。ラベルに書かれた文字は本当にヘッセのものか、最終年月日・採集地の 1927 年 7 月 14 日当時、オーストリア・インスブルクに本当に本人が居たかどうか証す。気の遠くなるような話だが、新部さんがある 1 枚の水彩画に目を留めた。ある街の風景だった。そこには 1927 年 7 月 10 日～14 日の旅行で Dorf Gasse (ドルフ通り) を描いたサインがあった。まさに彼はオーストリアに居た。しかも絵を描いた日にくだんのチョウを採集したことになる。

岡田先生と新部さんが手を取り合って大喜びしただろう姿が目には浮かぶ。73 年の時を越えた標本、持ち主の希望で大阪展のみの公開になったという。ヘッセ展は、本年 2 月に徳島県立博物館、8 月に軽井沢高原文庫をめぐるとのこと。ドイツでもカルフのヘッセミュージアムの後、いくつか巡ると愉快なお話し。

標本作りはあくまで繊細な神経と時間をたっぷりかけて施される。いずれ土に還るものたちを採って標本にして眺める気持ちを、私はまだ理解してはいない。だが人生の沢山の時間を虫にかけてきた人達が世界中に居ることは知っている。彼らによって成されてきた研究や標本が、さまざまな情報や警告を示す。

昆虫資料館は標本や文献の宝庫でもある。私はその番人をしている。もう以前のように蝶を追いかけて虫を捕まえ標本にしていく姿は見られない。むしろ小さなものたちの絶滅を危惧し防ぐために、チョウの採集も禁止している種もある。人間の生き方が地球を変えてしまった。現代文明が淘汰されるかもしれない。その寸前になって、世界中で CO2 削減に乗り出した。

黙って標本になっていた虫たちがやホルマリン漬けのものたちが、もう一度命を晒して証してくれることもある・・本当に無駄な存在などどこにもない。毎日標本展示室をまわりながら、声をかける。「今日も見事だ 綺麗だ 美しい」。

十観山近況

矢島千代子氏を会長に、上田自然に親しむ会のメンバーが昆虫館界隈の植物相を定点観測して下さっている。2008 年には木本編 54 種、草本編 162 種、シダ 7 種のご報告をいただき、昆虫館内や村の図書館で会の皆さんの写真展示もしてみた。手つかずの自然がもたらす草木の様相、多彩な植物と虫の関係が見えてくる。小さいものたちの絶妙なバランスもさることながら、継続した地道な調査にあたってくださる皆様に頭が下がる。また鬱蒼とした森に村の間伐の手が入った。

田沢温泉から当館まで3, 5 km、曲がりくねった山道を登り詰める。

昼なお暗き道中に気分も塞ぎがちだった。暗い森には花も咲かない。が、植樹され大きく育った杉の木が倒されるにつれ、森が少しづつ明るくなった。森が喜んでるように見える。生きものにとってやはりお日様の光りは大切だ。

森林組合の方が、毎日森に入っていた。以前マレットゴルフの通路だったというところを歩道にして山歩きを楽しめるようにするという。ちょうど今年はフジバカマなど蝶の集まる草木を増やそうと考えていたし、腐葉土のプールも作りたかったので、館内でも1具rになっっていないで山に入りたいと思う。春になったら食草や蜜源のお花を少しづつ植えたい。ボランティア頂ける方は1時間でもありがたい。

編集後記

時は2010年1月。冬眠中にて今回の館報は昨年を振り返って思いつくままに綴りました。

昨年は他に、夜間昆虫観察会も小川原代表のハチの講演会、自然観察会、丸川尚子さんコンサートなどがあり、昆虫文献、標本の寄贈もありました。各保育園、小学校からの小さなお客さまからは虫の絵なども贈って頂きました。ありがとうございました。

本年のスケジュールにつきましては、春先にお知らせします。まだまだ寒波が来ると思いますが、皆様暖かくしてお過ごしください。

追記 本文記載の「森温理の会」の仲間から電話。「温理作品を郷里の美術館でやろうというメンバーが栃木から来ているから来て！とのこと。宙に浮いて四賀村のヴィオパーク劇場に飛んでいきました。この絶妙なタイミング、見えない作用が働いている。生きるってなんて面白いのだろう！

栃木の仲間の皆さんの暖かいお人柄に触れ、ほっとして青木峠を越えての帰り道、雲ひとつない蒼空に大きな満月が顔を出した。その光のあまりの温かさに、月も心も解けてしまい、もう言葉にならない。

2010.1.31 野原

〒 386-1601 青木村田沢 1876-6 信州昆虫資料館
TEL 0268-37-3988 Fax 37-3964 冬期 080-1182-4576